

東北6県 気になる現場

仙台のBRIファーマ

東北大学発のバイオベンチャー、BRIファーマ(仙台市)は認知症治療薬の開発に向けて2026年にも初期の臨床試験を始める方針だ。25年内にベンチャーキャピタル(VC)などから研究に必要な資金を集める。30年代までに認知障害の患者が治療薬を手にとれる環境をつくり出すことをめざす。

アルツハイマー病や、パーキンソン病、レビー小体病型認知症といった認知障害は原因たんぱく質が腸を介して脳にたまることで症状が進む。同社の福永浩司社長は主にレビー小体型などを引き起こすたんぱく質の「 α シヌクレイン」に着目する。

α シヌクレインは脳に広がり神経細胞を破壊することが分かっている。その凝集を防ぐことができれば認知障害の進行を抑制・解消できるという。BRIファーマは「フ

東 認知症薬、26年にも臨床へ

北

「エーズ1」と呼ばれる初期段階の臨床試験を26年から開始する予定だ。31年ごろに海外の製薬企業に特許やノウハウの使用を許諾する「ライセンスアウト」を狙う。

創業では、大規模な臨床試験で有効性などを検証する「フェーズ3」に入ればおよそ300億円の費用が必要になる。福永氏は「日本の製薬会社でそれほどの投資ができる企業は限られる」と指摘。そのうえで「米欧には数十社はある。研究を



BRIファーマの福永社長は福島県立医科大学に置く「SIMOA」で認知障害のリスクを評価する(11日、福島市)

東北大発、検査普及にも力

脳画像や、脳脊髄液の採取による検査に比べて手軽で、安価に調べることができるとの強みだ。血液検査の実績は認知症薬の研究の土台ともなり得る。現在は検査キットを主に病院など大口の需要先に届けて採血し、検体を回収・分析している。いずれは個人相手にも広く販売できるように宣伝を強化する。

福永氏はかつて熊本大学医学部で教壇に立っていたこともあり、検査キットを利用する医療機関が九州で増えてきたという。今後は「東北や関東の病院や個人にキットを届け、回収して検査する体制を築きたい」と事業拡大を見据える。

「最近の研究で食生活や生活習慣を改善すれば40%ほどが正常な状態に戻ると示されている」。福永氏は軽度の認知障害についてこう解説する。そのうえで「他の病気と同じように、認知症も予防・治療できる時代になりたい」と意気込む。

(今井秀和)